

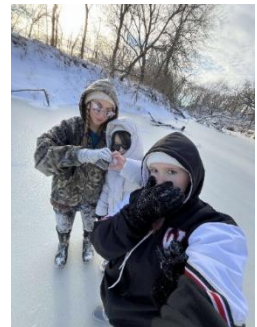
留学を終えて

岐阜高等学校 安江 祥（アメリカ合衆国）

私は2024年8月から約1年間、アメリカのカンザス州に留学しました。ここではその1年間の振り返りながら、感じたことや学んだことを綴ります。

留学を決めたのは、「外の世界をもっと知りたい」という思いと、単純に海外での生活への憧れがあったからです。日本の保守的で受け身になりがちな文化とは対照的な、アメリカの自発的で活発な文化に強く惹かれ、BIEE（文際交流協会）の交換留学プログラムを通じてアメリカへ渡ること決めました。

私が過ごしたのは、カンザス州のワシントンという町です。果てしなく広がる平原に囲まれた、人口よりも牛や馬の方が多いうような、まさに「田舎」と呼ぶに相応しい地域です。夏は40℃近く、冬は-30℃まで気温が下がる過酷な環境の中、6人家族と1匹の犬、2匹の猫とともに生活しました。また、幼小中高すべてを合わせても生徒数が450人に満たない小さな公立高校に通いました。



アメリカでの高校生活は、私にとって新鮮で多様な価値観に触れる貴重な機会になりました。当然、学校には日本人は1人もおらず、すべての授業は英語で行われていました。語学力を伸ばすには最高の環境ですが、同時に、どれほど分からないことがあっても英語以外の言語に頼ることはできませんでした。

特に苦労したのは必修のアメリカ文学の授業です。入植時代からの古い英語で書かれた原文を読解するこの授業では、知らない単語や難解な文構造の長文に苦しみました。毎晩遅くまで辞書と格闘しながら宿題に取り組み、最初の頃は朝3時まで起きていることもありました。しかし、次第に調べ方のコツを覚え、人に頼る力を身につけることで、どれだけ忙しくても夜12時には眠ることができるようになりました。今振り返ってみれば、この授業で私に求められていたのは「英語力」だけではなく、「助けを求める勇気」だったのかもしれない。ホストシスターやクラスメイト、先生方、ホストマザーは、私が助けを求めればいつも手を差し伸べてくれました。そんな“当たり前”の温かさに、私は初めて気づき、それに感謝する日々を送りました。

私は人の暖かさに支えられながら、異なる言語や異文化の地でこのように生活することができました。小さなコミュニティで地域の人々、学校の友人、先生方にたくさん支えられました。そしてホストファミリーに救われてきました。彼らがいなければ今このように笑顔でアメリカでの生活を綴ることはできなかったと思います。私が滞在したのは、大学生と同年の高校生、そして中学生の3人のホストシスターと、幼稚園に通うホストブラザー、ホストファザーとホストマザーのいる家庭でした。特に同年のホストシスターは私にとっての命綱そのものでした。学校のこと、生活のこと、たくさんのことを彼女に教わり助けられました。くどいくらい何度も何度も質問して、その度に丁寧に教えてくれました。だんだん本当の姉妹のように喧嘩もできるようになりました。ほかにも姉や弟、妹もたくさんの思い出を私にくれました。ホストマザーもホ

ストファザーも兄弟たちも、そしてその親戚の人たちもとても優しく、本当の家族のように優しく接してくださりました。それがうれしくて言葉だけでは表しきれないくらいの感謝の気持ちでいっぱいです。

友人たちとは、主にホストシスター経由や、同じ授業を取っていることをきっかけに仲良くなりました。年齢関係なく多くの子と仲良くなりました。小さな町で、遊ぶところはあまりありませんでしたが、友人の運転で町の外まで遊びに行くなど、本当に充実した日々を過ごしました。特に夏には友人の家族に、私とホストシスターも混ざって湖までキャンプに行くなど、本当に楽しい1年を過ごしました。



留学中唯一意識していた目標は「何にでも挑戦すること」でした。とにかく挑戦することを大切にしながら生活し、また知らない土地で、知らない言葉で、生活するだけでも精一杯の中で挑戦することは簡単なことではありませんでした。ですがこのような状況だからこそ、自分で決心し、単身で乗り込む経験は、留学中だからこそできることです。食べたことのない料理も、苦手な球技も、やったことのない美術やクラブ活動も私の「挑戦」でした。挑戦してみなければ自分の新たな可能性に気付くことはできません。

私の「挑戦」の1つでもあった美術の授業で、私は自身の意外な才能に気づくことができました。地区の美術展示やコンペでよい成績を収めることができ、学年末の表彰式で「Tiger Art Award」をいただきました。また、学校のクラブ活動である「FBLA」「FCCLA」「FFA」などにもすべて参加し、数多くのイベントの運営や、地域貢献活動などにボランティアとして関わりました。学生のビジネス活動を促す「FBLA」ではビジネスコンペのインターナショナルビジネスの部門に参加し州の大会まで進むことができました。初めてのビジネスコンペやそのドレスコードなどに戸惑いながらも良い経験になりました。これらの活動を通して、友人や地域の人々との輪を広げることができました。コミュニティー全体で学校を支え、学校の生徒はそれに対して貢献活動をしていくというシステムにとっても感銘を受けました。



このようにたくさんの経験をしたアメリカでの生活は、私1人では叶えることはできませんでした。日本の家族、学校の先生方、友人たち、アメリカのホストファミリーなど、多くの支えによって実現したこの留学の経験を人生の宝としていきます。またこの留学の経験から、今留学しようか迷う人たちの背中を少しでも押すことができると嬉しいです。留学という異国での生活は決してキラキラしたことばかりではありません。苦勞8割、楽しいこと2割です。学校のロッカールームのトイレで何度も泣きました。それでも学校に行くという決断やアメリカで過ごした経験は人生において、これからも私に勇気を与えてくれると思います。

